

用水路灌漑と地方小都市の影響で変貌する 旧地主村落・ディカトプラ

Development of Agriculture and Rural – Urban Interaction in Former *Zamindari* Village – Dikhatpura

中 里 亜 夫*・藤 原 健 蔵**

南 埜 猛***・シン B.V. ****・バゲール S.R. *****

Tsuguo NAKASATO,* Kenzo FUJIWARA,** Takeshi MINAMINO,**
B.V. SINGH,*** S.R. BAGER*****

Abstract This paper discusses the recent socio-economic changes of Dikhatpura villages lies on the alluvial upland along the Chammbal river and located near Morena having its *Tashil* and District Headquarters, Madhya Pradesh. Dikhatpura is a medium size village with population of 852 in 1990, dominated by *Jatav* and *Gujar*. Data on the transformation of crop farming, animal rearing and villager's employment are collected by door-to-door survey in 1990.

Untill 1951, Dikhatpura was a hamlet of *Zamindari*(landlord) village and suffered from frequent drought and dacoit attacks. Consequent on the abolition of the *Zamindari* system in 1951, *Jatav* and *Gujar* became land-owning tillers. The main *kharif* crops were *bajra* and sorghum under the traditional rainfed farming.

After the opening of canal irrigation in 1971, the marked oriented farming of wheat and mustard was introduced in *rabi* season and dairy farming developed newly. Consequently, *kharif* cropping are decreasing and the traditional farming systems has been forsaking rapidly.

On the other hand, non-agricultural workers(railway worker, service, driver, factory labour etc.) are increasing in nummber by influence of the economic growth of Morena and by the reservation system for the scheduled caste.

* 福岡教育大学教育学部； Faculty of Education, Fukuoka University of Education, 729 Akama, Munakata-shi, Fukuoka 811-41, Japan.

** 広島大学文学部，（併）総合地誌研究資料センター長； Faculty of Letters, Hiroshima University.

*** 広島大学大学院生； Post-Graduate Student, Hiroshima University.

**** Post-Graduate College, Ambah, Madhya Pradesh.

*****c/o Post-Graduate Cllege, Ambah, Madhya Pradesh.

目 次

はじめに－問題の所在	3. 用水路灌漑と緑の革命 (1971～1981年)
I. 標本調査村落ディカトプラの概況	4. ラビー期商品作物への特化 (1981年以降)
1. 位置および気候・地形環境	IV. 乳ウシ飼育の発展
2. 開村の経緯	1. 牝水牛飼育とミルク生産の増加
II. 人口・世帯とジャーティ構成	2. 家畜商人の活躍
1. 人口・世帯の構成とその推移	3. ミルクの産地仲買人
2. ジャーティ構成と集落構造	V. 農外就労の多様化
3. 家族構成と家屋形態	1. 地方小都市の発展と労働力需要の増加
III. 耕種農業の展開	2. ジャータブの鉄道勤務
1. 地主制下の農業 (1950年以前)	3. 都市での就労形態
2. 土地改革による農業の変化 (1951～1970年)	4. 村内での就労
	おわりに－村落変化と村民意識

はじめに－問題の所在

全国60万の村落を擁する広大なインドは、まさしく村落社会としての性格を色濃く残している国である。しかしながら、独立以降、これらの村落における爆発的な人口増加は、大都市（州庁所在地、50～100万人程度）への激しい人口移動を引き起こし、各地に都市化現象を顕在化させている。県庁や郡役所のある地方小都市（人口10万人程度）の都市化現象については、これまで否定的見解が多かったが¹⁾、1960年代末からの「緑の革命」や1970年代後半からの商品作物の導入などを通じて、村落は都市とダイナミックな経済的関係を持つようになった。また、地方小都市への通勤者の増加によって、村人の日常生活や生活意識にも大きな変化が認められるようになってきた。

このようなダイナミックな都市・村落間の関係は、伝統的な村落社会の構造にさまざまな変化を与えている。伝統的な村落社会では、ジャジマニ制による規制や低い識字率のために新しい技術の修得は困難であり、職業選択の幅は著しく狭いものであった。しかしながら、不完全ながらも土地改革が行われ、また道路・電化・灌漑等の経済的基盤が整備されるにつれて、都市との結びつきが複雑多元化し、単なる経済的な変化にとどまらず社会的な変化も生じている。とりわけ、1960年代以降の教育の普及（弘中、1984）や、政府の進めてきた各種の農村開発、指定カースト・指定トライブに対する保留制度（Reservation system）などによって、従来の伝統的職業の枠を越えた多様な職業への就労が可能となり、村落社会の構造そのものも大きく変質していることを認めることができる²⁾。

本論文は、「干ばつ常習地域の農業と村落変化」を主題として現地調査をしたマディヤ・プラデーシュ州北西端のディカトプラ村を、以上の問題意識から分析を試みたものである³⁾。現地調査は、1989年10～12月に概査と全世帯悉皆調査、90年8～10月に標本世帯調査等の本調査、さらに91年10月に補足調査を行った。悉皆調査には、アンバー大学 (Ambha College) 地理学教室の全スタッフおよび学生が当たった。

1. 標本調査村ディカトプラの概況

1. 位置および気候・地形環境

標本調査村として取り上げたディカトプラ (Dikhatpura) 村は、マディヤ・プラデーシュ州北西部のチャンバル川下流の右岸に広がる沖積台地に位置する旧徴税村 (Revenue village) である。行政的には、同州のモレナ (Morena) 県モレナ郡に属し、県庁所在地モレナ (人口69,864万人, 1981) の北北東約15kmにある (図1)。村の規模は、1990年8月の調査時点で世帯数109, 人口812人で、南隣りのピパルサ (Piparsa) 村とあわせて一つの行政村 (Gram Panchayat) を構成する。モレナ町は国道3号線 (通称アグラーボンバイ道路) と中央幹線鉄道が走る交通の要地で、後述するチャンバル流域開発計画⁴⁾による灌漑事業の完成後、マスタード等の商品作物生産の好況に支えられて、大きく発展している。ディカトプラ村の人々は、モレナ町まで自転車・バスおよび鉄道を用いて通勤・通学

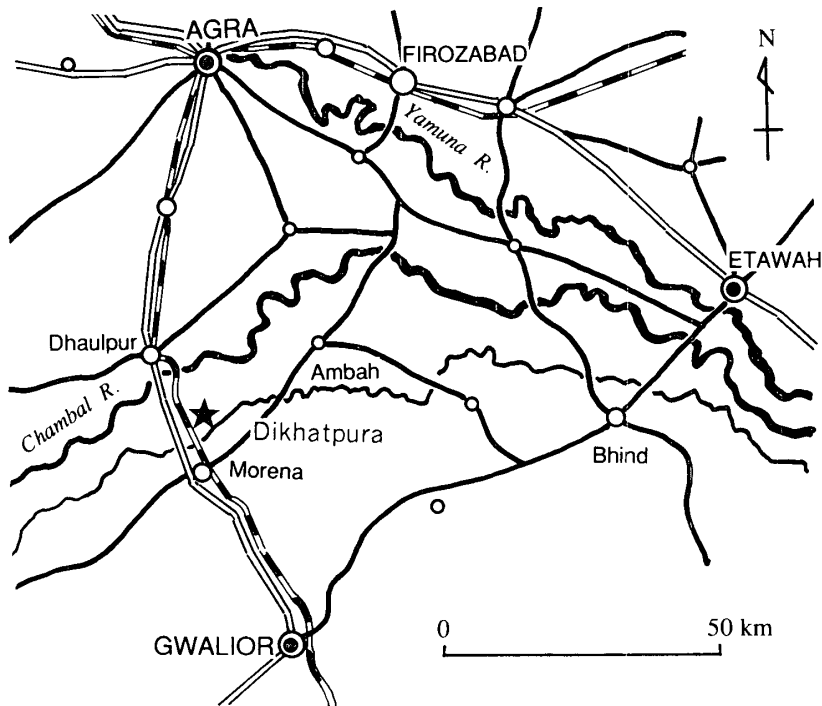


図1 ディカトプラ村の位置
Fig. 1 Location map of Dikhatpura Village

を行っており、農産物その他の物資輸送には村内のトラクターが利用される。

地税（土地）台帳の上では村の面積は352.8haで、その81.5%が耕地となっている。村域が広がる沖積台地は標高約160mで、きわめて平坦であり、沖積土起源の比較的肥沃な暗色のシルト質壤土⁵⁾におおわれている。ただし、村域の南東部はラヴィン（Ravine；ガリー性小谷）による侵食地帯で、放牧地となっている。村内には林地がなく、沖積台地の上はほとんどが耕地になっている。

年間の平均降水量は660mmであり、降水量に関しては政府の「干ばつ常習地域」（Drought Prone Area）の基準に該当するが、すでに大規模に灌漑がなされているため、モレナ県全体はその指定からはずされている。用水路灌漑が行われる前は、土質の関係のため池を作ることができず、また地下水位が深いために、ごく限られた数の井戸によって飲料水と小規模の灌漑が行われていたにすぎない。当時は、夏場の5・6月の高温や、それにつづく時期の干ばつに悩まされていた。チャンバル開発計画によるアンバー支水路が、村の中央を貫通して建設され、1971年から給水が始まった。本村の土地利用は表1の通りであり、純播種面積は244ha余り、灌漑率は91.3%である。

表1 ディカトプラ村の土地利用
Table 1 Landuse of Dikhatpura

		(1989年)	
	Area (ha)		Area (ha)
Kharif & rabi	287.553	Settlement area	2.425
┌ Irrigated	┌ 222.949	Pasture land	27.191
└ Unirrigated	└ 64.604	Ghura Gaut	2.527
Net sown area	244.04	Canals	21.464
┌ Irrigated	┌ 222.949	River Mala & Pokhar	1.097
└ Unirrigated	└ 21.089	Ravine	0.094
Fallow land	2.313	Railway line	1.923
┌ Current fallow land	┌ 0.122	Road, cart track & track	6.236
┌ Years fallow land	┌ 0.971		
└ Waste land	└ 1.220	Total	352.823

(地税台帳より作成)

2. 開村の経緯

ディカトプラ村の歴史は今からおよそ180年前に始まる（Bhatnagar,1964）。村の成立前、この土地は隣のピパルサ村に住むドゥーベ・ブラーマン（Dube Brahmin）の所有であり、グジャー等に小作させていた。その後、バモール（Bamor）から来住した3人のデキット・ブラーマン（Dikhit Brahmin）がこの土地を買い取り、小作人をそのまま受け継ぐかたちで小さな村（Pura）を作り、デキット・カ・プラ（Dikhit-ka-pura）と呼んだ。その後、3人の地主のうち後継者のいない一人が死んだとき、その土地が競売にかけ

られ、小作をしていたグジャーの手に渡った。19世紀の終わりごろから、ジャータブ (Jatav) がマイタナ (Maithana) ピプライ (Piprai) 等の近隣村から、さらにはチャンバル川を越えてラージャスターンから小作条件の良いこの村に移り住み、つづいてクマール (Kumhar) ・カデーラ (Kadhera) ・バダイ (Badai) も移住してきた。1901年当時、村の人口は134人にすぎなかった。1923年以降、村の所属はトンワガール (Tonwarghar) 県からモレナ県に移り、今日に至っている。

村の位置する地域は、歴史・文化的には、ウツタル・プラデーシュ州西部やラージャスターン州東部とともに、クリシュナ信仰とミルク飲料習慣を有する、いわゆるブリジ文化 (Briji-Culture) 地域である⁶⁾。また、チャンバル川下流一帯のラヴィン地域には、ダコイト (Dacoit) と呼ばれる盗賊集団が隠れ住み、主として大地主や金貸しを狙って襲撃していた。ダコイトの起源は、中世のムガル帝国支配に抵抗して隠れ住んだラージプート (Rajput) 族といわれ、イギリス支配時代はもちろん、独立後もしばしば年代前半まで跳梁していた。ディカトプラ村のブラーマン地主もしばしば襲われ、金品を奪われた。しかし、地主制度の解体と土地解放の進行につれて、彼らの存在意義は消滅していった。

II. 人口・世帯とジャーティ構成

1. 人口・世帯の構成とその推移

表2の通り、独立後、1940年代から60年代までは、村の世帯数と人口数は急増するが、70年代以降の増加率はやや低落傾向にある。調査時点 (1990年8月) では、村からモレナ町への実質的な転居世帯が5世帯 (人数62人) あったが、これを除外しても、80年代の人口増加率はわずか年率0.7%余りとどまり、ほぼ静止状態にあるといえる。調査時点での世帯数は109世帯で、人口数は812人である。

男性と女性の人口比は、男性100に対して女性は75～80と少なく、北西インドの中でも極端に低い値を示している⁷⁾。さらに、1990年の性別人口比を年齢階層別にみると、図2

表2 デカトプラ村の人口推移
Table 2 Change of population in Dikhatpura

年次	世帯数	計	男	女	年増加率 (%)
1941		325	185	140	
1951	58	379	212	167	1.66
1961	64	464	261	203	2.24
1971	74	632	362	270	3.00
1981	97	762	420	342	2.05
1990	109	812	454	358	0.72

(センサス調査および現地調査による)

の通り、4歳未満階層および25～39歳階層を除くすべての年齢階層で、男性の数が女性のそれを上回っている。注目されるのは、5歳未満階層の人口が5～9歳階層の人口に比べて著しく少ない点と、しかもこの年齢階層では女性人口が男性人口を大きく上回る点である。すなわち、近年における出生率

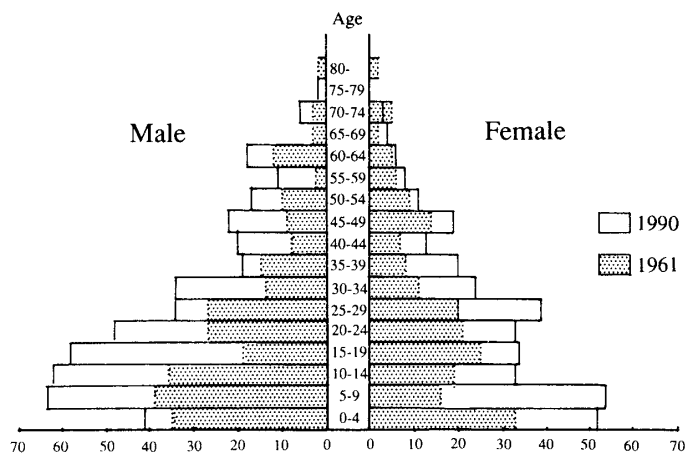


図2 ディカトプラ村の人口ピラミッド
Fig. 2 Population pyramid of Dikhatpura in 1961 and 1990

は低下の方向に変化していること、また女性の比率がわずかながら上昇していることを読み取ることができる。家族計画の普及⁸⁾および女子の地位向上を示すものと思われる。

2. ジャーティ構成と集落構造

1990年における本村のジャーティ (Jati) 構成は、表3の通り、指定カースト (Scheduled Caste, S.C.) のジャータブ⁹⁾ (伝統的職業は皮革業) が66世帯を数え、全世帯の60.6%を占める。他にグジャー (同じく牧畜) が24世帯、ブラーマン9世帯、クマー

表3 ジャーティ別世帯および人口数
Table 3 Households and population by jati in Dikhatpura

ジャーティ	世帯		人口			
	実数	比率(%)	男	女	計	比率(%)
Jatav	44	63.8	145	122	267	57.5
	66	60.6	227	187	414	51.0
Gujar	15	21.7	69	48	117	25.2
	24	22.0	137	94	231	28.5
Brahmin	3	4.4	21	15	36	7.8
	9	8.3	48	42	90	11.1
Kumhar	5	7.3	21	15	36	7.8
	8	7.3	38	29	67	8.3
Badhai	1	1.5	3	1	4	0.9
	2	1.8	4	6	10	1.2
Kadhera	1	1.5	2	2	4	0.9
	0	0.0	0	0	0	0.0
計	69	100.2	261	203	464	100.1
	109	100.0	454	358	812	100.1

(注) 上段は1961年, 下段は1990年

ル（同じく壺作り）8世帯，バダイ（同じく大工）2世帯となっている。このジャーティ構成は，北インドの標準的な村に比べて，指定カーストの占める割合がすこぶる高いことを物語る¹⁰⁾。その理由は，前述したように，この村がデキット・ブラーマンの村として多数のジャータブを集めて開かれたという成立過程から理解できよう。

1961年当時，ジャータブ世帯の占める割合は63.8%であり，ジャータブ卓越の特徴は現在よりさらに顕著であった。1961年からの最近30年間におけるジャーティ構成の変化をみると，①グジャーおよびブラーマンが世帯数・人口数ともに増加し，②それに比べて，ジャータブの増加は鈍く，結果として全体に占める割合を減じている。また，③カデーラ（Kadhera，綿紡ぎ手）も村を去っている。全体として，モレナ町その他の都市で職を得て転出するジャータブの数が多く，これに比べると，ブラーマンやグジャーは村にとどまって農業に専念するといった構図になっている。

ディカトプラ村の集落は，村域のほぼ中央に一つの塊となって発達している。図3は集落の構造であり，家屋の配置はジャーティ別に示してある。これによると，ジャータブが

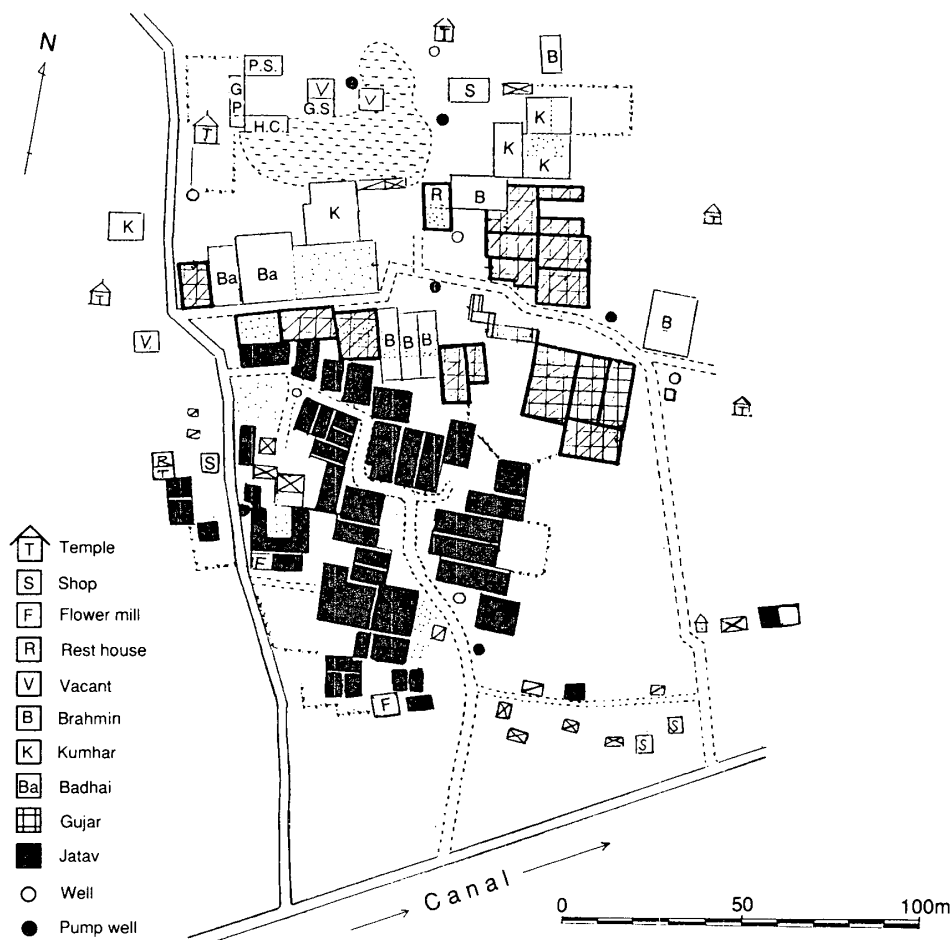


図3 ディカトプラ村の集落構造
Fig. 3 Settlement structure of Dikhatpura

集落の南半部に、その他は北半部に集中し、明瞭な住み分け (Segregation) がみられる。ジャータブ地区の家屋は狭い路地を挟んで密集しているが、北半部では東西に通じる道の両側にジャーティごとに小さくかたまっている。現在の村への進入路は国道から入ってくる北西部の道であり、これに沿って学校・診療所等の公共施設が集中し、最近では小さな雑貨店もできている。しかし、この道は1984年に完成した新しいもので、古い地籍図 (図8, 9) では耕地の畔道程度にしか記入されていない¹¹⁾。図8から明らかなように、古くからの本道は集落の東側にあり、母村ピパルサからまっすぐに北上し村域を貫通していた。上述の集落北半部の東西の道は、この本道から分かれてくるもので、その入口近くに当時の地主であったブラーマンや有力農民のグジャーが住んでいたといえる。当時は、北半部の地盤はジャータブ地区よりやや高ったと思われるが、現在は集落サイトの高まりによって排水がさえぎられ、中央の広場や学校の周囲は汚水のたまり場となっている。特に、モンスーンの大雨の時には、集落内の道はひどいぬかるみになる。このような表面排水の悪さは、集落南側に灌漑用水路が建設されたことによって一層ひどくなり、集落内の生活環境を悪化させている。

3. 家族構成と家屋形態

近年、インドの村落社会においても、大家族つまり合同家族 (Joint family) の崩壊が進んでいるといわれる。表4はジャーティ別に示した家族型である。全世帯109のうち、45世帯 (41.3%) が核家族型であるが、合同家族型が34世帯 (31.2%)、中間型が26世帯となっており、合同家族がなお根強く残っている¹²⁾。合同家族が特に多いのはグジャー (14世帯) であり、グジャー全世帯の58.3%がこのタイプである。一方、ジャータブは12世帯で、18.2%にすぎない。

グジャーが特に合同家族の形をとる理由は、均分相続による土地細分化の不利を、合同

表4 ジャーティ別家族形態状況
Table 4 Family types of Dikhatpura by Jati (1990)

ジャーティ	家族数		家族形態			
	世帯	平均	A	B	C	D
Jatav	66	6.3	12	15	35	1
Gujar	24	9.6	14	5	5	0
Brahmin	9	10.0	4	3	2	0
Kumhar	8	8.4	4	1	3	0
Badhai	2	5.0	0	2	0	0
合計	109	7.5	34	26	45	1

(現地調査による)

(注) A は合同家族, B は中間型, C は核家族型, D はその他 (1人住まい)

GUJAR

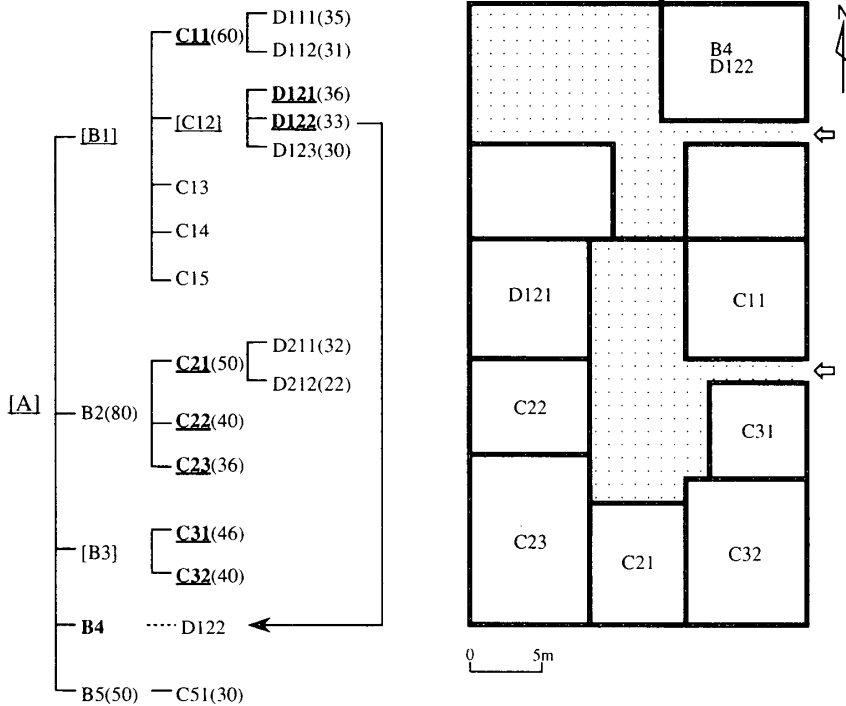


図4 グジャー家族の世帯関係と住居配置

Fig. 4 Relationship of Gujar households and their house's

(注) 1. 既婚男子のみ, []は死亡, ()は年齢, ボールド字は世帯主.
2. 下線は農業 (右肩数字は所有地面積エーカー).

家族による共同経営でもって克服しようとするものである。一般的にいえば、合同家族型と耕地所有面積との関係は深く、所有耕地が大きいほど合同家族型の割合が高い。親・兄弟の世帯関係および彼らの住居配置のジャーティー別の家屋配置についての事例を図4～6によって説明しよう。図4はグジャーの場合であり、祖父を同じくする12世帯のうち、7つの世帯が強固な外壁で囲まれた屋敷の中に住んでいる。父世代のB4、B5および同世代のC13、C14、C15は別の場所に住んでいる。C12は死亡し、長男のD121がこれを相続し、次男のD122は子供のいないB4の家産を相続している。屋敷の中央に中庭があり、これに面して7つの世帯の住居が並ぶ。中庭はこれら家族の日常生活の場であり、収穫物の乾燥・選別の場であり、一方の端に家畜が繋がれている。男性たちは中庭の一面で就寝するが、女性と子供はそれぞれの家の中で、寝む。調理・洗濯は別々に行われる。強固な外壁で囲んでいるのはダコイトの襲撃に備えるためであり、窓は夏季の暑熱対策も兼ねた覗き見程度の小さなもので、入口も頑丈な鉄扉で厳重に守られている。全世帯は農業に従事しており、農耕や家畜飼育にきわめて密着した家屋形態や日常生活を示している。

図5は、ブラーマンの事例である。4人の兄弟は同じ面積の土地（7.23エーカー）を父親から相続し、グジャーの場合と同様に外壁で防御した同じ敷地で暮らしている。長男のB1は高齢のために家督を息子のC11に譲っているが、村の協同組合長¹³⁾を勤め、なお一

BRAHMAN

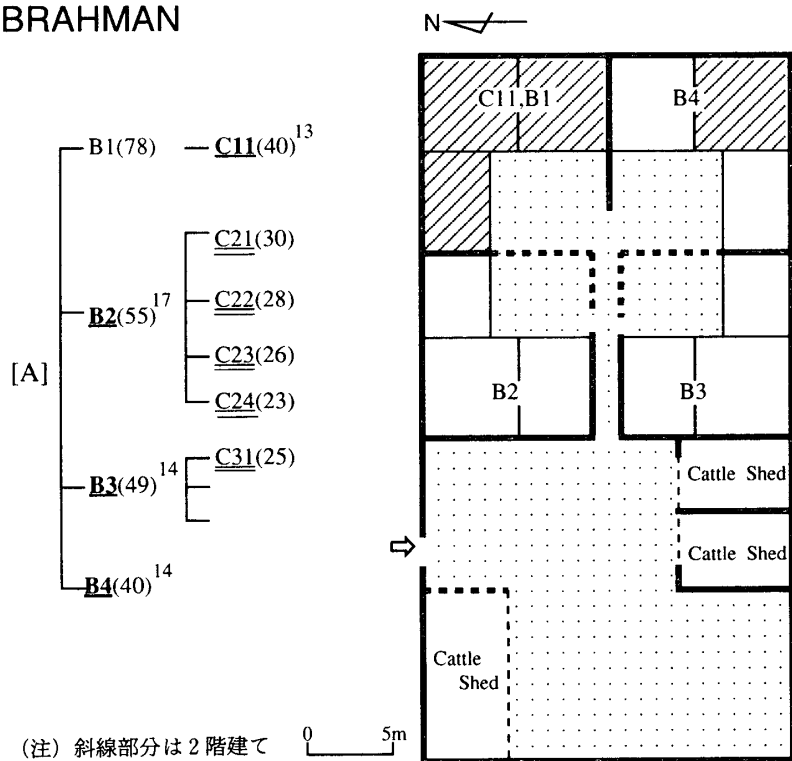


図5 ブラーマン家族の世帯関係と住居配置
Fig. 5 Relationship of Brahmin households and their house's



写真1 ブラーマン家族の家屋内部 (図5)
Fig. 1 Inside of Brahmin's house in Fig. 5

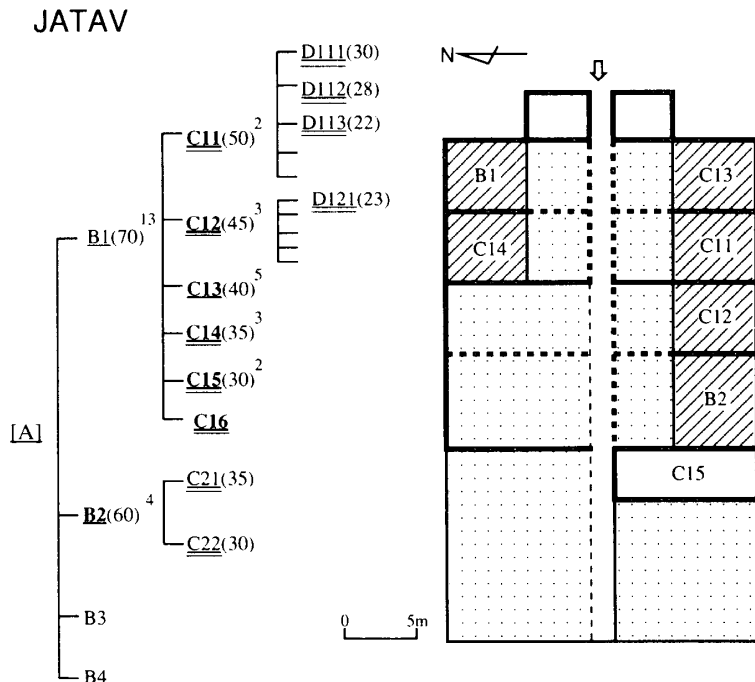


図6 ジャータブ家族の世帯
関係と住居配置
Fig. 5 Relationship of Jatav
households and their
house's

族の中心となっている。現在の世帯主はすべて農業であるが、B2の3人の子供やC11の長男が農外就労をしており、グジャーに比べて離農ないし農外への依存傾向の強さが認められる。これは居住形態にも現れており、屋敷内では畜舎と農作業場を居住区から別個に離している。また、居住区についても田の字型に配置した4世帯の住まいの中央に庭はあるが、それを背だけ程の擁壁で仕切って、それぞれの生活の独立を図っているようである。この住まいは比較的新しいタイプであり、ブラーマン家族の生活にも個別を重んじる時代の流れが感じられる。

図6は、数少ないジャータブの集住する世帯の例であり、4人兄弟の長男と次男の子供達の7世帯からなる。長男B1は30年前に土地改革によって10.3エーカーの土地を得たが、鉄道踏切番の職を得て蓄財し、ピパルサ村にさらに5.2エーカーの土地を買った。6人の息子はそれをほぼ等分に分与され、教師をしている1人（C16）を除いて、すべて一つの屋敷に共同住宅を建てて住んでいる。C11・C12は建築業、C14・C15は鉄道員で、C13が父の家産を継いで農業をしている。建築業の次男B2とその家族も一緒に住んでいる。このように居住を一つにして家計を合理化することによって、村のジャータブの中で最も豊かな生活を得ているように見受けられる。屋敷の入口に一族共通の部屋があり、また屋敷内の空地で牝水牛が一緒に飼われている。

III. 耕種農業の展開

1. 地主制下の農業（1950年以前）

地主制のもとでのディカトプラ村の天水農業は、独立後の土地改革の実施と1971年の灌漑用水路の完成によって大きく変わった。さらに、1980年代には、マディア・プラデーシュ州の奨励作物であるマスタードの栽培を導入して、単一商品作物への特化という形でダイナミックな展開をみせている。独立後の農業の発展は、土地改革・用水路灌漑・マスタード特化を画期として、4つの時期に分けることができる。

まず、土地改革以前の村の農業については、具体的資料が得られないので、村人からの聞き取りをもとに断片的にまとめてみる。すでに歴史の項で述べたように、この村はディキット・ブラーマンの村として成立し、母村ピパルサ出身のグジャーをはじめ、近隣村から集まってきた多数のジャータブによって構成されていた。ジャータブが周辺から集まってきたのは、それぞれの村でのラージプート地主による搾取と抑圧から逃れるためであり、デキット・ブラーマン地主を頼りに来住し、伝統的な職業である皮革・製皮を捨てて小作人または農業労働者となつたといわれる¹⁴⁾

当時、小作を12年間続けると、その土地の相続や譲渡の権利が得られるモウルシ (Moursi) という資格を規定した法律があった¹⁵⁾。しかし、この村の地主も、そのような資格の成立を防ぐため、借地の期間を短く切るなどの手段を講じたので、小作人が実際に永代小作権を得てパッカ・テナント (Pacca tenant) になる機会は少なかった。特に、ジャータブには又小作人 (Sub-tenant, Kaccha tenant) として入村した者が多く、地主の使用人、農業労働者、靴修理などをしながら、わずかばかりの土地を小作していた。刈分け小作は少なかったといわれ、パッカ・テナントの権利を得ることはきわめて困難であった。

当時の農業経営は、きわめて不安定な夏のモンスーン降雨に依存する二圃式農業であり、ジョワール・バージラ等のカーフ期の雑穀生産を中心として、耕作用のバロック (去勢牡牛) が飼われていた。肥沃な土壌条件のために、平年にはかなりの生産を期待できたが、5～6年おきに襲う干ばつの被害は村人の生活を困難にしていた。上記したザミンダール制のもとでの搾取およびこうした干ばつ被害に加えて、ダコイトによる略奪と社会不安は、この村の農業発展を阻害する大きな要因であった。家屋の形態でも説明したように、ダコイト襲撃に対応する日常的な出費や労力、さらには精神的負担は莫大なものであり、農業経営の思いきった改善等はほとんど望めなかった。この村が最後にダコイトに襲われたのは1956年であり、その時地主のブラーマンは縛り上げられ、金品をすべて奪われた。その

ため、防御用の銃をモレナで多数買い求め、村の防御を一層厳重にしたが、それに支払われた費用は村人から徴収されたといわれる。

2. 土地改革による農業の変化 (1951~1970年)

土地改革の第1弾はザミンダール制の廃止であり、これによって多くの孫小作・又借人にすぎなかったジャータブ農民は永代小作権を獲得し、さらに実質的な土地所有権を得た。表5-(1)は1960年のジャーティ別の土地所有状況である。土地改革の前、村の土地の大部分を所有していたブラーマンは、そのほとんどを失い、村の総土地面積の9.9%を所有するのみとなった。これに引きかえ、ジャータブ(表5-(1)では旧名のチャマールで示されている)所有の土地は総計で45.3%と、村の約半分の土地を占めている。しかし、ジャータブ農家世帯数が大きいため、1世帯当りの規模は1.9haと小さくなっている。

注目されるのはグジャーである。彼らは土地改革前、すでに一部は自作農として自分の土地を有していたが、ブラーマンの土地を小作していたので、その分を土地改革によって新たに所有することができた。こうしてグジャー14世帯の農家は、それぞれブラーマンに匹敵するほどの所有規模となり(合計すると、村の総土地面積の39%)、次の時期の農業発展を担う自作農への地歩を固めることができた。一方、ザミンダール制の撤廃による地主の没落に伴い、ダコイトは襲撃の理由と目標を失い、ついに1960年代前半から鎮静化へと向かった。この地方の村落にとって、これまで大きな負担となっていた防御費用と精神的負担がなくなったわけであり、このことは他の地方ではみられない土地改革の大きな成果として特筆できよう。

ザミンダール制廃止後しばらくは、耕種農業の基本は以前のもの大きく変化することはなかった。1960年当時の耕種農業の状況は表6および図7の通りである¹⁶⁾。モンスーン

表5 ディカトプラ村におけるジャーティ別土地所有
Table 5 Landholdings by Jati in Dikhatpura

(1) 1961年				(2) 1989年			
ジャーティ	世帯数	耕地面積 ha (%)	一戸当り 面積(ha)	ジャーティ	世帯数	耕地面積 ha (%)	一戸当り 面積(ha)
Chamar	43	81.7 (45.3)	1.9	Gujar	24	109.6 (53.8)	4.56
Gujar	14	70.0 (38.8)	5.0	Jatav	63	51.4 (25.3)	0.82
Brahmin	3	17.8 (9.9)	5.9	Brahmin	9	28.1 (13.8)	3.12
Kumhar	5	8.6 (4.8)	1.7	Kumhar	8	10.1 (4.9)	1.26
Carpenter	1	1.4 (0.8)	1.4	Badhai	2	2.1 (1.0)	1.06
Kadhera	1	1.2 (0.7)	1.2	Others(村外)	-	2.2 (1.1)	-
計	67	180.5 (100.0)	2.7	計	106	203.5 (100.0)	1.92

(地税台帳による)

表6 ディカトプラ村における主要作物の作付面積の変化
Table 6 Changes of sown area under main crops in Dikhatpura

	1961	(%)	1985	1989	(%)
(単位: ha)					
カリフ作物					
Great millet (Jowar)	58.27	(37.3)	1.68	0	(0.0)
Pearl millet (Bajra)	45.73	(29.2)	36.31	43.39	(76.1)
Green lentil (Moong)	14.97	(9.5)	8.04	3.21	(5.6)
Pigeon pea (Arhar)	36.02	(23.0)	13.99	7.55	(13.3)
Sesame (Til)	1.21	(0.7)	0.06	2.18	(3.8)
Fodder	0	(0.0)	0	0.65	(1.1)
計	156.2	(100.0)	60.08	56.98	(100.0)
ラビ作物					
Wheat	8.9	(8.3)	62.9	56.54	(24.6)
Gram	80.93	(75.4)	21.27	5.3	(2.3)
Mustard (Sarson)	4.05	(3.8)	57.58	163.63	(71.3)
Barley (Jau)	13.4	(12.5)	—	2.68	(1.2)
Fodder	0	(0.0)	0	1.3	(0.6)
Vegetable	0	(0.0)	0	0.02	(0.0)
計	107.28	(100.0)	141.75	229.47	(100.0)

(注) 1961, 1985はセンサス調査, 1989年は土地台帳

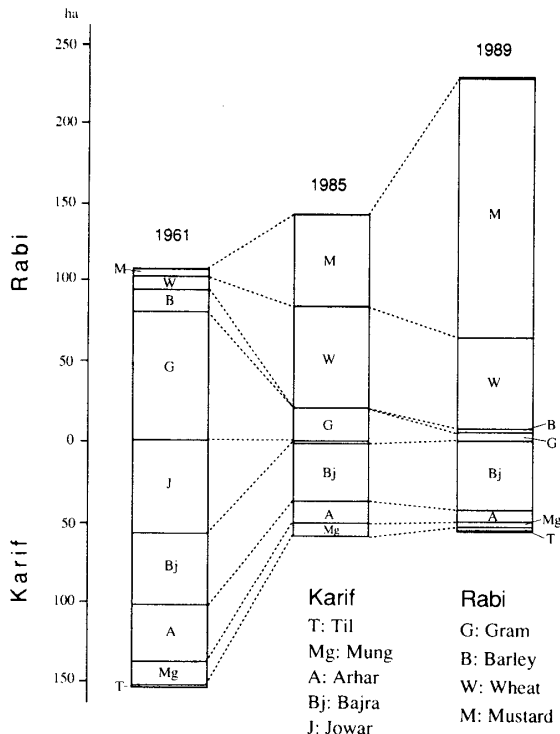


図7 ディカトプラ村の1960年, 1985年および1989年の主要作物の作付面積
Fig. 7 Change of sown areas under main crops in Dikhatpura, 1960, 1985 and 1989

降雨に依存するカリフ作の総作付面積は156.2haで, その66.5%を雑穀のジョワール・バジーラが, 23.1%が豆類のアルハール (キマメ) が占める。この3大作物で全体の90%となる。これに対して, ラビー作の総作付面積は107.3haと, カリフ作の3分の2しか作付されず, その20%が大麥・小麦, 75.4%がグラム (豆類) によって占められている。

1967-68年におけるカリフ期の作付状況を図8に, ラビー期の作付状況を図9に示す。カリフ期の作付パターンは雑穀と豆類の混播が基本で, その組み合わせには①ジョワール+ムーン (アオアズキ) +アルハール, ②ジョワール+バージェラ+ムーン+アルハール, ③バージェラ+ムーン+アルハールの3つがある。図8から分かるように, ②のパターンが



図9 ディカトブラ村のラビ作物の作付状況 (1966-67年)
Fig. 9 Cropping pattern of Dikhatpura in Rabi season, 1966-67



図8 ディカトブラ村のカリフ作物の作付状況 (1966)
Fig. 8 Cropping pattern of Dikhatpura in Kharif season, 1966

最も多い。ほかに、タバコ・ジュート・麻があり、さらに飼料作物としての青刈ジョワールが加わる。一方、ラビー期の作付パターンは、図9のようにグラムの栽培¹⁷⁾を基本にして、これに他の作物を組み合わせたものである。その中では、グラム+大麦の組み合わせが多い。

カーリーフ期の各作物は、よく耕起してモンスーン降雨を待っていた畑に5月末～6月中旬につぎつぎと播種される(図10)。収穫するのは、雑穀類が11～12月であるが、アルハールは翌年の3～4月までかかる。ラビー作のグラムや麦類の播種は11～12月であるので、アルハールはもちろんのこと、収穫の遅いカーリーフ作のジョワールとも作期が重なる。このようにカーリーフ季とラビー作の作期が重なるために、また一部は地力維持の関係から、当時は1年1作の形態が多く、二毛作耕地は一部に限定されていた。つまり、モンスーン降雨依存のカーリーフ期の雑穀とラビー期の豆類・麦類が隔年で栽培されており、両方とも降水の不足ないし不安定や地力の維持・保全のために混作が支配的であった。草肥・牛糞など耕地への施肥はわずかであり、休閑による地力回復を基本としていた。耕起はきわめて

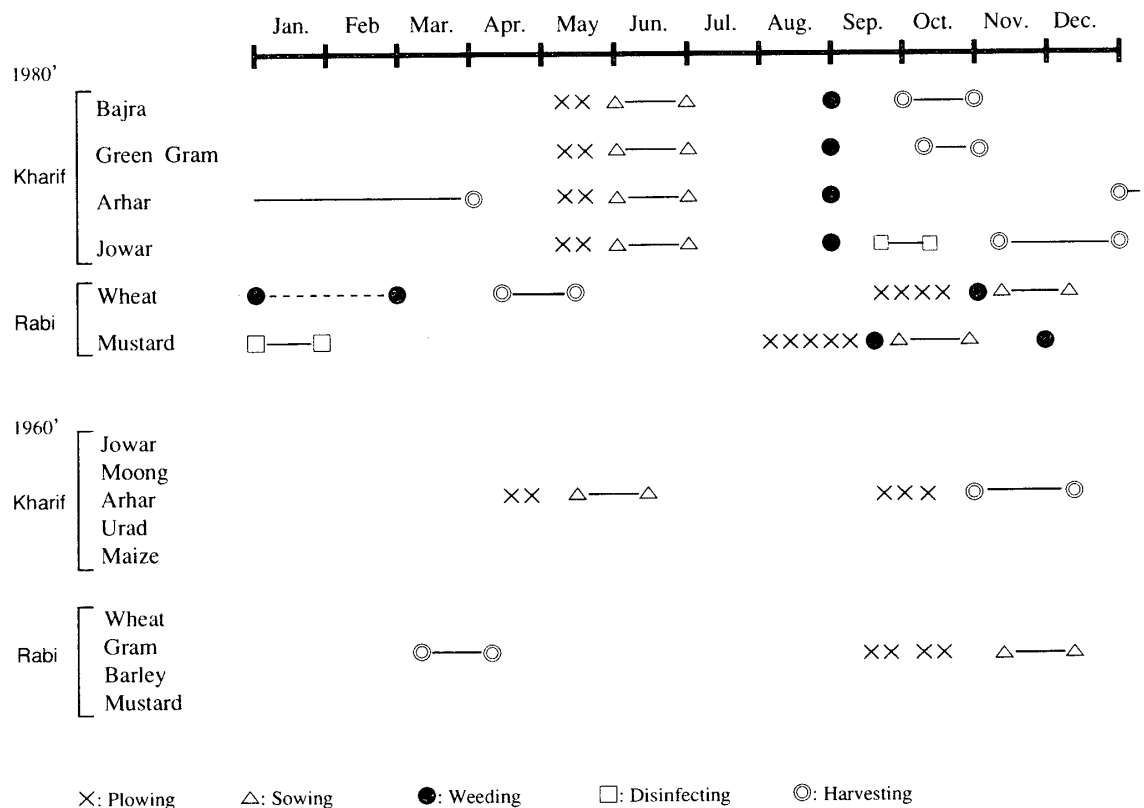


図10 ディカトプラ村における農業カレンダーの変化
 Fig. 10 Change of agricultural calendar in Dikhatpura

重要であり、それにはバロック（去勢牡牛）が使役された。1組のバロックは通常2～4 haの耕地を耕起した。

3. 用水路灌漑と緑の革命（1971～1980年）

ディカトプラ村の農業にとって最大の課題であった用水路灌漑が、1971年に開始されたことによって、村の発展を阻害してきた要因がほぼ完全に取り除かれた。

用水路灌漑の導入はまず第1に、天候が落ち着く冬季における小麦の安定的な耕作を可能にし、これによって折しもパンジャブ州で成功していた小麦の高収量品種を採用できるようになったことである。1970年代の村の地税（土地）台帳を入手出来なかったため、当時の小麦作付の増加状況を数字で示すことはできないが、モレナ県全体の統計から推察すると（図11）、県下の小麦の栽培面積は1970年の約45,000haから1978年の約95,000haへと倍増している。この間、グラムはやや減少気味で、これに対して後述するマスタード（Musturd, カラシナ）が増加の気配をみせている。このようにディカトプラ村を含むモレナ県では、チャンバル流域開発による用水路灌漑の開始が、時期的に高収量品種の小麦の導入など一連の「緑の革命」に一致したため、村の農業は大きく進展し、同時に村人の生活全般も急速に変化することになった。

用水路灌漑導入前には、カリーフ作としてジョワールの占める割合が大きかった。しかし、ラビ作として小麦が大幅に導入されてくると、収穫が11月から12月中旬までずれこむジョワールは小麦の播種期と重なるため、しだいに作付けされなくなった。前掲図7および表6から知られるように、1985年には、1961年当時に58.27haあったジョワールの作付

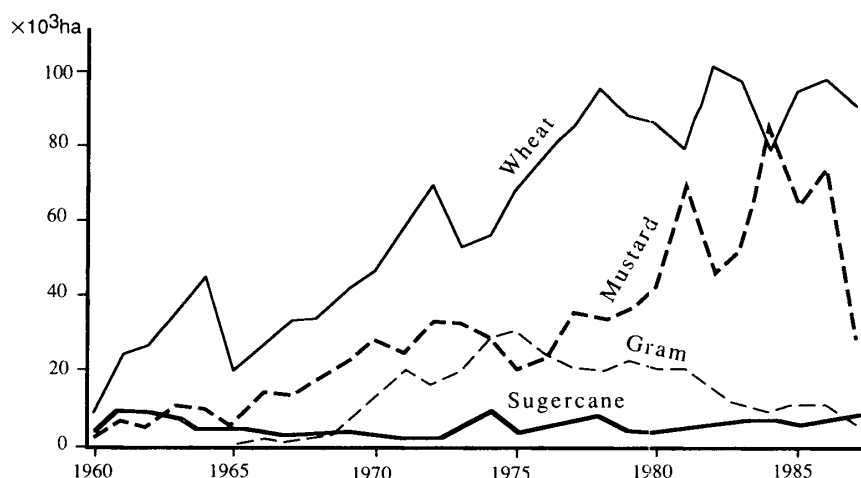


図11 モレナ県における主要作物の作付面積の推移

Fig. 11 Changes of sown areas under main crops in Morena District, 1960 to 1987



写真2 灌漑分水路。モンスーン期には用水は供給されない。
Fig. 2 Dried distributary canal of irrigation in kharif season.



写真3 ジョワールの脱穀に忙しい村人達（11月中旬）
Fig. 3 Villagers are busy with threshing of jowar at the mid-November.

面積は1.68haに激減し、1989年現在では土地台帳の上では完全になくなっている¹⁸⁾。同時に、アルハールの作付も少なくなっており、そのためにカリーフ作全体の作付面積が1961年の半分近くまで減少している。こうした中であって、バージェラだけは生育期間が比較的短いこともあって減少の度合が少なく、各種の豆類と混播されながらカリフ期の主要作物となっている。

以上のように、用水路灌漑導入後のディカトプラ村では、ラビー期の小麦作とカリーフ期のバージェラ中心の混播との典型的な二毛作の作付パターンが成立していった。1970年代の資料ではないが、1986年の地税（土地）台帳によって当時の二毛作の作付パターンを推察してみると、村の土地の総筆数は456筆で、そのうちの126筆、152.8ha（筆数で12.6%、面積で33.5%）が二毛作として利用されている。二毛作の組み合わせの主なものをあげると、バージェラと小麦（15筆、9.4ha）、②バージェラ+ブラックグラムと小麦（15筆、8.5ha）、③バージェラ+グリーングラムと小麦（9筆、3.9ha）である。これを作期別にみると、カリーフ作では①バージェラのみ（33筆、26.8ha）、②バージェラ+グリーングラム（25筆、21.9ha）、③バージェラ+ブラックグラム（24筆、21.9ha）が多く、ラビー作では圧倒的に小麦のみ（53筆、27.9ha）が多い。

4. ラビー期商品作物への特化（1981年以降）

すでに前節で述べたように、1980年代に入るとカリーフ期の作付面積が全般的に減少し、代わってラビー作の作付が増大した。モレナ県全体についてみると（図11）、1970年代前半に急増した小麦が、1978年以降は頭打ちの状態になった。これに代わって、1981年以降マスタードがにわかに増加し始め、小麦とほぼ拮抗する形になった。これはマディア・プラデシュ州政府の農業政策（一県一作物奨励）に合わせて、モレナ県がマスタードの主産

地形成を進めているためである。ディカトプラ村でも、マスタードの作付面積は1985年に小麦のそれとほぼ同じであったが、作付時期の関係や高い収益性などの理由から、1989年には小麦のほぼ3倍になり、ラビー作全体の71%を占めるに至った（図7，表6）。これに対して、小麦はわずか25%を占めるにすぎない。しかも、用水路灌漑導入以降、作付面積を減少させているカーフ作（57ha）に対して、ラビー期の作付面積はマスタードの増加によって急激に拡大して223haとなり、カーフ作の4倍以上を記録するまでになった。まさに、“マスタードのラビー期単作”農業への展開が進んでいるといえる（図12，13）。そのため、図12から知られるように、カーフ期に何も作付されずに休耕地になっている土地が多い。

ラビー期マスタード単作の事実を1990年の地稅台帳で検証すると（表7）、一毛作として利用されている土地はラビー期・カーフ期あわせて240筆、146haと記帳され、これは村の総面積の41.7%（私有地総面積に対しては58.9%）に当たる。二毛作面積は101.69haであり、前述した1986年時点より一毛作が増えた分、約50haが減少している。この一毛作の内訳は、ラビー期が97.9%と圧倒的に多く、しかもその81.4%がマスタードの単作となっている。しかも、表7に記したように、マスタードだけを栽培しているケースは103筆、78.3haであり、マスタード栽培のいちじるしい特化・集中がみられる。そこには、古くから受け継がれ発達してきた混作・輪作等による伝統的な土地利用の体系や思想が根底から崩壊している様子を認めることができよう。

それでは、こうしたマスタード栽培の特化への担い手はどうであろうか。ジャーティ別にマスタードと小麦の単作面積および、各ジャーティが所有する総面積に対するその割合を示したのが表8である。市場指向性の強いマスタード栽培はグジャー世帯によって圧倒

表7 作付種別耕地の筆数・面積

Table 7 Number and area of a plot by cropping

(1989年)

	筆数	面積(ha)	比率(%)
村総数	456	350.07	100
公有地	117	101.78	29.1
私有地	339	248.29	70.9
一毛作地	240	146.60	59.0
ラビー作	230	143.54	57.8
マスタードのみ	103	78.29	31.5
マスタードほか	77	39.06	15.7
マスタード以外	50	26.21	10.6
カーフ作	10	3.06	2.2
二毛作地	99	101.69	41.0

(地稅台帳より作成)



図13 ディカトプラ村におけるラビー作物の作付状況 (1989-90年)
Fig. 13 Cropping pattern of Dikhatpura in rabi season, 1989-90



図12 ディカトプラ村におけるカーフ作物の作付状況 (1989年)
Fig. 12 Cropping pattern of Dikhatpura in kharif season, 1989-90

表8 ジャーティ別のマスタード単作および小麦単作
Table 8 Single-cropped area of mustard and wheat by jati

(1) マスタード単作				(1989)	(2) 小麦単作				(1989)
ジャーティ	筆数	面積(ha)	比率(%)	所有面積中の比率(%)	ジャーティ	筆数	面積(ha)	比率(%)	所有面積中の比率(%)
Gujar	99	72.36	61.7	66.0	Gujar	10	2.50	23.5	3.5
Jatav	32	15.41	13.1	30.0	Jatav	20	6.43	60.4	41.7
Brahmin	23	12.53	10.8	44.6	Brahmin	3	0.94	8.8	7.5
Kumhar	9	7.69	6.5	56.0	Kumhar	1	0.16	1.5	1.6
Others	10	3.80	3.2		Others				
Common	7	5.55	4.7		Common				
Total	180	117.34	100.0		Total	36	10.63	99.9	

(地税台帳より作成)

的に担われ(約62%), しかも彼らはその所有する耕地の66.0%をこれに当てている。ブラーマンとクマールも所有耕地の半数前後をマスタード栽培に割いている。これに対して、小規模経営農家の多いジャータブ世帯は、その所有耕地の41.7%を小麦栽培に当てており、その収穫のかなりの部分は自家消費に当てていると思われる。小麦単作の約60%はジャータブ世帯によって担われている。

村内には現在、マスタード生産者組合があり、種子・肥料等の安価な購入、栽培技術の指導、収穫期における集荷センターの設置など、マスタードの生産・販売に関する条件整備に当たっている。その上、マスタード栽培は高い水準で価格が維持され、安定かつ高い収益性を期待できることから¹⁹⁾、グジャー農家を中心に驚くべき早さで村人に普及している。こうした本村でみられるラビー期灌漑による商品作物の単一栽培への急激な移行は、モレナ県の各地で認められる現象であって、干ばつと地主制のもとで維持されてきた労働粗放的な農業から、土地改革以降に成長してきた自立的農民層による労働集約的農業へ、さらに資本集約的農業への発展を意味するものといえる。しかしながら、こうしたカーリー期の休耕はモンスーン期の強雨に耕地を裸地のままでさらすことになり、また用水路灌漑による沖積台地面での給水は地下水面上昇をきたし、ラヴィン侵食を促進させる結果ともなっている²⁰⁾。さらにまた、村落内の農業労働者需要の低下や商品作物導入をめぐって生じる農民間の経済格差の拡大なども、新たな農業・農村問題として注目していく必要がある。

IV. 乳ウシ飼育の発展

1. 牝水牛飼育とミルク生産の増加

この地方はI章で触れたように、古くからミルク飲料習慣のあったブリジ文化地域であ

り、もともとウシ飼育の盛んなところであった。これに加えて、1980年代から集約的家畜振興事業 (Intensive Cattle Development Scheme) が実施され、その一環としてミルク生産用の優良品種のウシ (牛および水牛) の改良・育成が積極的に進められてきた。その結果、牝牛では Jersey 種、牝水牛では Bhadowi Buffalo 種が新たに導入された。同事業では、この他に緊急の獣医派遣サービスや良質の飼料供給が受けられるようになり、また近くのバモールにミルク工場が建設されて²¹⁾、酪農業への期待が高まっている。

ディカトプラ村では1990年現在、ゼブ牛や水牛の飼育が、伝統的職業を牧畜とするグジャーの世帯のみならず、他のジャーティのほとんどの世帯でも行われており、村全体の飼育世帯率は98%ときわめて高い (表9)。1世帯平均のウシ飼育規模は5.5頭余りで、30年前のそれより若干増えている。この増加は、主としてジャータブとクマールの世帯で飼育がほぼ倍増したためであり、グジャーとブラーマンの世帯ではわずかながら減少している。

しかし、これに至るまでにはいくつかの変遷があった。1961年当時、耕作用のゼブ牝牛120頭、搾乳用ゼブ牝牛77頭、牝水牛114、合計して324頭のウシが飼育されていた²²⁾。搾乳用の牝ウシの飼育は、村の東南端にある共同放牧地 (28ha) や休憩中の耕地で行われ、濃厚飼料 (油粕など) を与えることは数世帯を除いてほとんどなかったといわれる。また、ミルクとギー (バター) がモレナ町の商人に一部販売されていたが、現金収入のために自家消費を削ってまで行われることはなかつた。当時村内には、種ウシとしてゼブ牛が2頭、水牛が1頭飼われ、ウシの村内生産が一部おこなわれていた。

表9 ジャーティ別のウシ飼育状況
Table 9 Number of bovine by jati

ジャーティ	世帯 総数	飼育 世帯数	ゼブウシ 牝 牝	水 牝 牝	牛 牝 牝	ウシ 総頭数	一世帯 当りウシ	搾乳中のウシ 総頭数	一世帯当り
Jatav	66	64	58	36	31	161	4.33	88	1.38
	44		66	21		130	2.95		
Gujar	24	24	40	39	20	99	8.25	93	3.88
	15		40	53		144	9.60		
Brahamin	9	9	14	4	0	28	5.11	17	1.89
	3		7	7		22	7.33		
Kumhar	8	8	11	6	2	49	8.50	19	2.38
	5		8	4		22	4.40		
Badhai	2	2	0	0	1	3	2.00	2	1.00
	1		3	1		6	6.00		
Kadera	1								
						0			
Total	109	107	123	85	54	340	5.52	189	1.77
	69		124	86		324	4.70		

(注) 各ジャーティの上欄は1961年センサス、下欄は1990年の現地調査による。

用水路灌漑によってラビー期の小麦栽培が行われてくると、放牧の方式は以前の自由放牧から一部が舎飼い中心の管理放牧に変わった。それは、共同放牧地での草生力が過放牧によって低下したという事情もあるが、村内における耕種農業の発展にともなう家畜飼育内部の変化による面も見逃すことができない。すなわち、耕作様式が二毛作に集約化されて耕起・運搬などバロックに対する需要が一

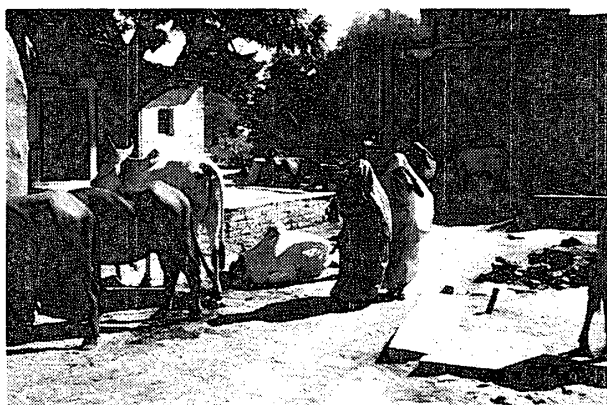


写真4 ミルクウシの飼育
Fig. 4 Rearing of Cows and she buffalos on the lane of settlement

層高まったこと、そのために在来種を売って優良品種のハリヤナ種の飼育に切り替えが進行了たこと、さらに村内での家畜飼料の生産が増加したことなどにより牝牛の飼育管理を強めていったと言える。しかし、耕作用の牝牛の実数は増えておらず、1977年には1961年よりむしろ減少している（表10）。また、搾乳用牝牛の数が44頭まで減少したが、その反面、これを大きく上回る数の増加が牝水牛にみられた。これはグジャー世帯を中心に搾乳用ウシ飼育を牝牛から牝水牛に移す傾向があったためである。IV-3章で述べるように、この時期にモレナ町へのミルク販売が試みられたが、集乳できる量が少ないために本格化するに至らなかったとされている。

表10 ウシの種類別頭数の推移
Table 10 Changes in number of bullock, cow and buffalo

種 類		a) 1990	b) 1977	c) 1961
ゼ	牝	耕牛	97	100
		仔牛	26	23
		計	123	123
ブ	牝	成牛	45	44
		育成牛	25	21
		計	85	78
合 計		208	201	210
水	牝	搾乳牛	145	112
		育成牛	125	34
		計	270	146
牛	牝	仔牛	82	40
		合 計	352	186
総 計		560	387	324

(注) a)は1990年8月(現地調査), b)は1977年(家畜センサス調査), c)は1961年(家畜センサス調査)

ところが1980年代に入ると、ウシの飼育は総数の増加およびその構成の両面において大きく変化した(表10)。ウシの総数は560頭となり、1977年に比べて1.5倍の増加を示している。とりわけ、牝水牛の増加が目立ち、1977年の1.9倍になっている。このように牝水牛の飼育が急増した背景には、つぎの要因があったと指摘できる。第1は農村総合開発計画(IRDP)によって政府補助金を利用し、低所得階層でも牝水牛を購入できるようになったこと²³⁾、第2はマスタード栽培の普及によって飼料として油粕(マスタードの搾り粕)を安くかつ容易に入手できるようになったことである。それに伴って、水牛商人が増加して取り引きが活発になり、またミルク販売人が現れてモレナ町への販売ルートが整備された。

1979年から86年までの間に、農村総合開発計画等による補助金を受給した世帯は28戸あり、総額で11万5528ルピーになっている(表11)。とくに、1981年だけで18世帯が受給している。この金額は周辺農村に比べて多い。受給目的をみると、28世帯のうちの22例が牝水牛の購入に当てられている²⁴⁾。補助金で牝水牛を購入した世帯は、2世帯のグジャーを除くと、すべてジャータブである。彼らが土地改革で得た耕地は少なく、その上、切り売りや均分相続で一層零細化して、農業だけでは生計を維持することができなくなっていた。

次に、マスタードの油粕を搾乳ウシに濃厚飼料として与えることが一般化したのは、マスタード栽培が盛んになる1980年代からである。村で収穫・集荷されたマスタード種子は、モレナ町内の4製油工場(最大は組合経営、他は民間)と多数の小規模製油場に運ばれる。

表11 Dikhatpura 村関連の農業補助金交付状況(1979~1986年)

Table 11 Beneficiaries of various credits for economic weaker section in Dikhatpura, 1979 to 1986

Year	Jati	Items	Total		Year	Jati	Items	Total		
			Loans (Rs)	Subsidy (Rs)				Loans (Rs)	Subsidy (Rs)	
1979	Gujar	Diesel pump	7400	1000	1981	Jatav	Buffalo	5000	1667	
1980	Jatav	Bullock	2100	700		Jatav	Buffalo	4700	1667	
1981	Gujar	Buffalo	4900	1225		Jatav	Buffalo	5000	1667	
	Gujar	Buffalo	5000	1667	1982	Gujar	New well	5000	750	
	Jatav	Buffalo	2900	725	1983	Gujar	Buffalo	2500	834	
	Jatav	Buffalo	5000	1667		Jatav	Shop	2000	666	
	Jatav	Buffalo	5000	1667	1984	Jatav	Buffalo	2500		
	Jatav	Buffalo	4970	1656	1985	Jatav	Buffalo	3333	1667	
	Jatav	Buffalo	3150	1050	1986	Jatav	Bullock cart	5000	1667	
	Jatav	Bullock cart	5000	1343			Jatav	Buffalo	2500	833
	Jatav	Buffalo	4900	1633			Jatav	Buffalo	2500	833
	Jatav	Buffalo	2375	791		(B.D.O 資料により作成)				
	Jatav	Buffalo	5000	1667						
	Jatav	Buffalo	5000	1667						
	Jatav	Buffalo	5000	1667						
	Jatav	Buffalo	5000	1667						
Jatav	Buffalo	2800	933							

そこで生じた油粕は、家畜の飼料として村に安く売られる。ミルクの価格がその含有脂肪率で決まるため、油粕の需給は搾乳ウシの飼育に欠かせない要件となっている。

2. 家畜商人の活躍

一般に、農村の家畜飼育における家畜商人の役割は重要である。農民にとって家畜は年収の数倍にも及ぶ高価な存在であるため、優れた品評能力と信用性のある家畜商の存在は、村における家畜飼育、ひいては村の経済を左右するといっても過言ではない。

1960年当時、ディカトプラには家畜商人は2人（グジャー・ブラーマン各1人）しかいなかった。1970年も2人であったが、搾乳ウシ飼育の盛況に伴って家畜商人が増加し、80年は5人、85年は8人²⁵⁾、そして90年には11人（8世帯）となっている（表12）。彼らはすべてグジャーである。彼らの所有耕地は1世帯平均17.1エーカー（6.84ha）と大きく、世帯規模も12.3人と多い。しかも、家族型は1例を除いて、すべて合同家族である。

1980年代に入ってからの特水牛の取引商人の増加は、本村に限ったことではない。この傾向は、モレナ町における人口増加と食習慣の変化によってミルク需要が飛躍的に増加し、搾乳ウシ飼育が成長産業と見なされてきたこと、一方、耕起・運搬用のトラクター導入²⁶⁾とマスタード栽培の単作化によって、従来の役畜飼育から搾乳ウシ飼育への切り替えが進むことが見込まれたためである。

この地方における搾乳用特水牛の取引は、主に子牛の生まれるモンスーン季の7～9月に集中する。多くは誕生間もない子牛と親牛と一緒に売買される。表12の④家畜商の例では、

表12 ディカトプラ村の家畜商人とその世帯
Table 12 Cattle brokers and their households in Dikhatpura

番号	家畜商世帯		家畜商と世帯主との続柄(年齢・始めた年)	耕地(エーカー)			ウシ(うち搾乳)				年間収入(ルピー)		
	職業(年齢)	家族数		灌漑	天水	計	水牛	セブ牛	計				
1	家畜商(30)	20	本人(30・1978) 叔父(36・1987)	25.8	2.1	27.9	5	(3)	6	(2)	11	(5)	42,000
2	農業(50)	10	長男(30・1980)	25.8	0.0	25.8	8	(4)	3	(0)	11	(4)	43,000
3	家畜商(60)	12	本人(60・1960) 三男(31・1982)	19.6	0.0	19.6	15	(8)	4	(2)	19	(10)	—
4	農業(60)	11	次男(30・1986)	16.0	0.0	16.0	6	(4)	4	(1)	10	(5)	75,000
5	農業(70)	11	長男(35・1980)	12.9	2.6	15.5	3	(2)	5	(2)	8	(4)	—
6	農業(65)	12	長男(40・1979)	13.3	0.0	13.3	5	(2)	3	(1)	8	(3)	—
7	牧畜(70)	16	長男(26・1980) 四男(15・1985)	7.2	4.1	11.3	4	(2)	6	(2)	10	(4)	—
8	家畜商(36)	6	本人(36・1978)	7.2	0.0	7.2	6	(3)	3	(0)	9	(3)	—
	(55.1)	12.3		16.0	1.1	17.1	6.5	(3.5)	4.3	(1.3)	10.8	(4.8)	

(1990年現地調査による)

搾乳用牝水牛の購入地は、主としてラージャスターン州のバーラトプル (Bharatpur) ・バヤナ (Bayana) ・ラージャケーラ (Rajakhera) 等チャンバル川を越えた地域であり、5～6歳のムーラ (Murrah) 種や在来種 (デーシ, Desi) の購入が多い。購入した水牛は自分のトラックで運び、モレナ町の家畜市場やアンバー (Ambah) 町・グワリオール (Gwalior) ・ポラシャ (Porasha) 等の定期家畜市場で販売する²⁷⁾。過去3カ年の取引実績では、1頭当りの利益が200～250ルピーで、1カ月で25～30頭前後を取引きし、5,000～7,000ルピーの利益を得ている。昨年、営業拡大のためトラックを購入し、自分の牛だけでなく他の商人達の牛も運んでいる。その他の、例えば世帯番号②の長男の場合では、1987年度には15,000ルピーの利益をあげている。

本村の家畜取引には、前述したようにグジャーが独占的に当たっている。取引する場所は主として家畜市場であるが、彼らはオートバイやトラックを利用して、村内および周辺の村をめぐる広範囲に搾乳牝水牛の取引を行っている。さらに、彼らは一部が高利貸しを兼ねるなど、かつてのブラーマン地主に代って村の経済的実力を握るまでに成長している。

3. ミルクの産地仲買人

インドでは近年、村落に酪農協同組合、都市にミルク加工工場を設立して、ミルクの生産・流通の効率化と拡大を図る動きがある²⁸⁾。アーナンド・モデル²⁹⁾として全国的に注目されているこの近代的生乳流通システムは、一般に消費地から離れた比較的交通の便が良くない農村地域に多い。これとは違って、都市近くの農村で生産される生乳の販売は、今日なお個人的なミルク仲買人に依存している場合が多い。

モレナ町周辺では、図14のように町から自転車で片道1時間程度、半径約15kmまでが

伝統的な産地仲買人によるミルク集乳圏となっている。近年、この集乳圏の外側の村において酪農協同組合設立の傾向がみられる。ディカトブラ村はこの集乳圏の範囲内にあり、酪農協同組合は設立されていない。村内で生産されるミルクは、村内の3人の専門ミルク仲買人によって取引されている。彼らはいずれもグジャーである。乳が多く出る12～1月には、さらに2～3人の村人が副業的に加わる。彼らは朝夕の2回、村で生産されたミルク



写真5 自転車で町に売りに行くミルク仲買人達
Fig. 5 Milk brokers going on for sale milk to Morena by bicycle.

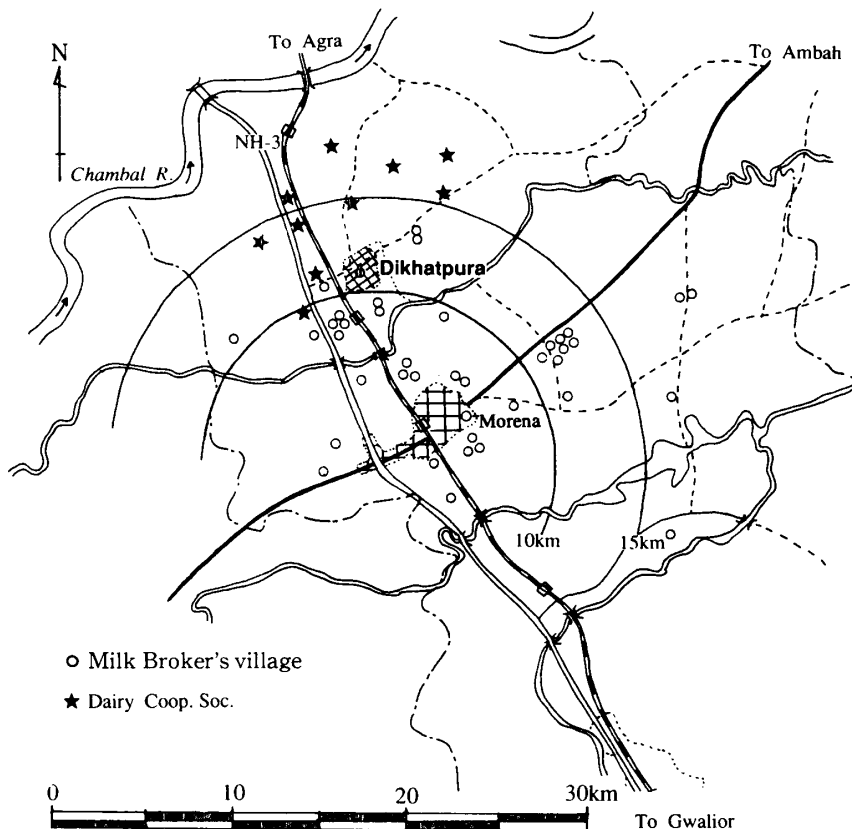


図14 モレナ市の集乳圏
Fig. 13 Milk Shed of Morena Town

を村人から直接買い集め、2個の牛乳缶（多くは40リットル）を自転車（またはオートバイ）の荷台にぶら下げてモレナ町まで運び、茶店や製菓店・乳業店など、あらかじめ契約している所に直接に販売する。朝は日の出前から遅くても9～10時頃までである。帰りは日用雑貨を買って帰ることもあるが、普通は急ぎ帰村する。夕方ふたたび、ミルクを集めて町へ売りに行く人もいるが、取扱量は朝よりかなり少ない。

本地域で水牛の乳がたくさん出る時期は、前述したように12～1月であるが、調査した9月はミルクの最も少ない時期であった。この時期の専門ミルク販売人A氏の場合は、1970年（当時25歳）から始めたが、ミルクの集荷が思うにまかせず中止、77年に再開したがまた中止、ところが1987年から今日までは順調に続いている。村内のグジャー農家を中心に12世帯から、朝は40リットル、夕方は30リットルを集め、モレナ町の茶店・製菓店に20リットル（1977年以来）、チャンバル川を越えたラージャスターン州ダウルプール（Dhaulpur）の乳業店に50リットル（1987年以来）を販売し、月平均で1,700ルピーの利益を得ている。

ミルク販売人B氏の場合は、両親と4人兄弟の合同家族(人数16人)の次男で、所有耕地は11エーカーと狭いため、長兄と次弟も家畜商をやっている。彼は1981年からこの仕事を始め、現在村内に10世帯、隣村のピパルサとピパルケラ(Piparkhera)に15世帯の顧客を有し、朝のみ70リットル余りを集荷し、モレナ町のキサン・デイリー(Kishan Dairy, 7年前より20リットル)とグワリオール市のマルターン・デイリー(Maltan Dairy, 2年前より50リットル)に販売し、月平均1,500ルピーの収入を得ている。C氏の場合は、1988年からの開業のため契約農家は村内に4世帯(15リットル)しかないが、ピパルサ村やビンドワ村(Bindwa)に計25世帯(65リットル)あり、月平均1,800ルピーの収入をあげて順調である。集荷・販売は午前中の1回だけで、モレナ町の茶店(10リットル)とラムクリシュナ・デイリー(Ram Krishna Dairy, 60リットル)および一般家庭(10リットル)への運搬にはオートバイを利用している。

これら3人のミルク産地仲買人は、基本的には自村内の農家からミルクを集め、モレナ町などの茶店・製菓店・乳業店に納めている。売上金は月に3回受け取り、農家には8～10日おきの現金払いである。1リットル当り約1ルピーの利益を得ている。

V. 農外就労の多様化

1. 地方小都市の発展と労働需要の増加

地方の小都市における近年の都市化現象は注目される。モレナ町は県庁の所在する都市でありながら、干ばつとラヴィン地形という自然条件の劣悪性と、ザミンダール制下の農村の疲弊およびそれと表裏の関係にあったダコイトによる社会不安などの理由によって、久しく発展の流れから外されていた。しかしながら、ザミンダール制の廃止、大規模用水路灌漑の導入、マスタード特産地としての経済的地位の確立など、従来モレナ町の発展を阻害してきた要因がつぎつぎと除去されていくにつれ、この町は商業・交通運輸・工業・建設業等、多くの都市機能を集め、急速に人口を増加させてきた。周辺農村からの移住や常雇・日雇いを含めた日々の通勤が増加している。労働力需要の過小が問題とされるインド農村地域にとって、地方小都市モレナの発展にともなう労働力需要の増加と多様化は、注目に値する。

こうしたモレナ町の急速な都市化現象は、これより15kmの距離にありながら、国道と鉄道で結ばれているデカトプラ村に対して、きわめて大きな影響を及ぼしている。それは、前章で考察した牝水牛飼育の盛況と、主としてグジャー世帯による家畜商・ミルク販売の台頭にとどまらず、より広範に及んでいる。III-2において、土地改革によって小作人であったジャータブは土地を手にし、1960年当時、1世帯当り平均で1.9haを所有していた

ことを指摘した(表5)。しかし、1990年現在では、その面積が0.82haと、ほぼ半減している。それには、世帯数が増加したことも関係あるが、ジャータブ所有の総面積が減少していることからわかるように、彼らが土地を売却したためである。では、せつかくの土地をなぜ手放したのか、ここに問題がある。その理由として、一つは指定カーストであるジャータブには政府の職業保留制度があり、これを利用して鉄道等の公的機関に勤務できる機会が与えられていること、第2はモレナ町の経済的發展に伴う労働力需要の増加が、この村のジャータブ世帯の農業離れを可能にしていることがあげられる。以下、この2点を中心にして村民の農外就業についてみていくことにする。

2. ジャータブの鉄道勤務

表13は、家族の中に鉄道関係に勤務している者がいる世帯の一覧であり、全部で19世帯

表13 村外就労世帯一覧(鉄道関係のみ)

Table 13 List of railway workers of Dikhatpura

番号	世帯		耕地(エーカー)			ウシ	世帯主 職業	就業 者数	年間 収入	就労地
	形態	人数	灌漑	天水	計					
1	A11	8	2.1	0	2.1	8	鉄道員	1	12,000	Noorabad
2	B11	5	4.1	0	4.1	6	公務員	2	50,000	Morena,Morena
3	A12	12	4.1	1.1	5.2	4	鉄道員	3	71,880	Morena,Delhi,Gwalior
4	A12	11	2.1	0	2.1	6	農業	2		Morena,Morena
5	B11	6	4.1	0	4.1	6	鉄道員	1		Gwalior
6	B11	6	1.5	0	1.5	2	鉄道員	1		Morena
7	A12	10	1.5	0	1.5	4	農業	1	17,200	Dholpur
8	A13	14	4.1	0	4.1	5	鉄道員	1		Dholpur
9	B11	7	1.5	0	1.5	4	鉄道員	1	18,000	Morena
10	C	7	2.1	0	2.1	4	鉄道員	1		Gwalior
11	C	5	1.5	0	1.5	3	農業	1		Morena
12	A12	13	5.2	0	5.2	6	鉄道員	1		Morena
13	C	3	1	0	1	2	鉄道員	1		Shevpur
14	C	5	0	0	0	5	鉄道員	1	15,600	Gwalior
15	A12	8	1	0.5	1.5	7	鉄道員	1	21,000	Gwalior
16	B11	7	1.5	0	1.5	5	鉄道員	1	13,200	Morena
17	B11	10	2.1	0	2.1	5	鉄道員	2	47,800	Morena.Bheel
18	A22	11	1.5	0	1.5	5	鍛冶	1	12,600	
19	A13	12	1	0	1	4		1	15,600	Gwalior
平均		8.4	2.21	1.08	2.29	4.7		1.26		
20	B11	5	2.1	0	2.1	5	鉄道年金	1	7,600	Morena
21	D	2	1.5	0	1.5	2	鉄道年金	0	3,600	
22	B12	7	4.1	0	4.1	6	鉄道年金	0	12,000	
平均		4.7	2.56	0	2.56	4.3		0.3		

(1990年現地調査による)

(注) 1.世帯番号1,2はクマール、他はすべてジャータブ。

2.世帯主が鉄道員の場合、世帯番号1,14を除くすべては、農業を兼ねている。

19名を数える。クマールの2世帯を除く17世帯がジャータブ世帯であり、基本的には指定カーストに対する保留制度によってこの職を得ている例が多い³⁰⁾。19名のうちの14名が世帯主、3人が長男、叔父・弟が各1名となつている。モレナ駅区での勤務が10人と最も多く、グワリオール駅区が5人、ドールプル駅区2人、その他が2人となつている。モレナには通勤できるが、グワリオールの場合は、単身もしくは学校に通う子供と一緒に間借りをし、週末か、月に2、3回帰宅するといわれる。この他、鉄道年金を受給している3世帯があるが、いずれもジャータブである。年間の収入は15,000~20,000ルピーであり、建設や運送といった他の業種に比べてかなり条件がよい。世帯主が鉄道員の場合、所有耕地は3~4エーカー程度にすぎず、鉄道勤務のかたわら農業を副業として行っている。ただし、4~6頭のウシを飼育している世帯が多く、それからの収入も少なくはない。こうし

表14 村外就労世帯一覧（鉄道関係を除く）

Table 14 List villagers getting a job (excluding railway) outside of Dikhatpura

番号	世帯			耕地 (acre)	ウシ 頭数	村外就労者		年間収入 (Rs)
	ジャータブ ¹⁾	主職業	家族数			人数	職種 ²⁾ /関係 ³⁾ /勤務地 ⁴⁾	
1	Bad	農業	4	3.6	2	1	雑貨店経営 /S/M	
2	Bad	農業	6	3.6	2	1	サービス /S/M	
3	Bra	農業	13	3.1	5	2	サービス /N2/G2	
4	Bra	農業	18	9.2	9	2	機械修理 /S2/M2	
5	Bra	農業	7	8.3	7	1	織物工場 /S/J	24,000
6	Guj	農業	11	2.1	6	1	サービス /B/M	
7	Jat	鉄道員	12	5.2	4	3	仕立屋 /S/M, 警察官 /S/G, トラック運転手 /S/D	71,800
8	Jat	鉄道員	10	2.1	5	2	織物工場 /S2/M,B	47,800
9	Jat	農業	12	4.2	7	2	トラック運転手 /S2/M2	32,000
10	Jat	農業	7	2.1	3	1	バス従業員 /S/M	
11	Jat	農業	7	3.1	8	1	機械工 /S/M	6,000
12	Jat	鉄道年金	5	2.1	5	1	運転手 /S/M	7,600
13	Jat	農業労働	5	1.0	2	1	仕立屋 /S/M	
14	Jat	農業	4	2.1	4	1	書記 /S/M	9,600
15	Jat	農業	12	3.1	6	1	軍人 /S/A	19,200
16	Jat	農業	9	1.5	6	1	書記 /S/S	
17	Jat	運送業	7	1.3	0	1	トンガ輸送 /H/M	5,400
18	Kum	農業	2	5.7	9	3	用務員 /S3/M3	20,000
19	Kum	農業	20	5.2	9	3	機械工 /S2/M2, リキシャ/S/M	7,200
20	Kum	公務員	5	4.2	6	2	用務員 /H/M, 鉄道員 /U/M	50,000
21	Kum	公務員	6	2.1	8	1	書記 /H/M	19,400
22	Kum	農業	9	2.1	9	1	用務員 /S/J	19,200
23	Kum	農業	10	5.4	11	1	サービス /S/M	31,600

1) ジャータブ: Bad; Badhai, Bra; Brahmin, Gur; Gujar, Jat; Jatav, Kum; Kumhar

2) アンダーラインなしは通勤者, アンダーライン付きは週末帰村者

3) 世帯主との関係: H; Householder, S; son, B; Brother, U; uncle, N; Nephew

4) 勤務地: M; Morena, G; Gwalior, D; Dhaulpur, A; Agra, B; Bombay, J; Jhansi

(1990年現地調査による)

た安定した収入によって、II-3で説明したCのように住宅の新築・改築が目立ち、消費生活もかなり向上している。

3. 都市での就労形態

モレナ町における都市化の進展によって、ディカトブラの村人の中にも運転手や諸種のサービス業、工員として通勤する人も多くなってきた。1990年調査当時の村外就労者は、前述の鉄道関係を除いても30人近くいる（表14）。そのうち、モレナ町への通勤者は18人で、内訳は世帯主がわずか3名、長男が8名、次男が3名、その他が4名である。次男・三男がトラック・バスの運転、建設労働等、ややハードな仕事が多いのに対して、世帯主や長男は比較的安定した職、例えば役所の用務員など公的サービスに就労する傾向があり、ここにも保留制度による恩典が少なからず認められる。なお、トラック運転者が目立つが、これはモレナ町で手広く運送会社を営んでいる本村出身者（グジャー）がおり、本村の人間を優先して雇っているという事情がある。現在、3、4人が通勤しているが、すでに数世帯がモレナ町に移住したという。

モレナ町で働く他の例としては、トンガ（乗合馬車）・力車の営業、衣服仕立て、修理工等がいる。いずれも30歳代以下の若い世代であり、この村がとみに町との間に経済的・社会的つながりを強めている状況をうかがわせる。

4. 村内での就労

地方小都市モレナとの近接性のため、ディカトブラ村の村落機能はかえって発達しにくい状況にある。日常的に必要な物資のほとんどは、通勤の帰りや農産物を市場に運んだ折りに買い込んでくるし、また町から行商人が頻繁にやってくるからである。したがって、村内には小さな雑貨店が2軒（ジャータブ）、衣服仕立て1人（ジャータブ）、農具・牛車修理1軒（伝統的職業を大工とするバグイはいるが、彼らではなく、ジャータブ1世帯の親子3人が従事している）、それに近年の小麦常食に対応して開業した製粉業2人（ジャータブ）がいるだけである。他に恒常的な職業として教師1人（ブラーマン）、村警察1人（ジャータブ）、郵便職員2人（グジャー）がおり、これに前述したミルク産地仲買人の3人（グジャー）が加わる程度である。したがって、村内での就労機会は農業労働と土木・建築の雇用を除くと、いちじるしく限定されているといえる。

1981年の国勢調査によれば、モレナ郡下の農業労働者はわずか4%余り、本村でも本業をもつ188人のうちで農業労働者と位置づけられている人はいない。しかしながら、今回の調査ではモレナ町在住の地主に年雇されている2人の他に、村内のグジャー農家に雇用

表15 村内での農業・建築労働者の一覧

Table 15 List of agricultural and constructional labourers in Dikhatpura

番号	世帯			耕地 ウシ		世帯主の職業		村内での就労者	村外就労者数	年間収入 (Rs)
	形態	人数	年齢	(エーカー)	(うち牝水牛)	本業	副業			
農業労働										
1	A12	12	45	5.2	4(2)	鉄道員	農業	主婦	3	71,880
2	B11	7	40	4.1	6(4)	農業	農業労働	世帯主	0	12,000
3	C	5	50	3.1	4(2)	農業労働	農業	世帯主	0	
4	C	5	31	2.6	5(2)	農業	農業労働	世帯主	0	4,800
5	B11	4	50	2.1	5(4)	郵便局員	農業	長男	0	
6	B11	8	60	2.1	7(4)	農業労働	農業	世帯主, 長男, 次男	0	4,800
7	C	4	40	2.1	3(2)	農業労働	農業	世帯主	0	
8	B11	7	40	1.5	9(6)	農業	搾乳牛	長男, 次男	0	3,500
9	B11	4	45	1.5	3(2)	農業	農業労働	世帯主	0	7,200
10	C	2	28	1.5	4(2)	農業	農業労働	世帯主	0	
11	B11	5	40	1	2(0)	農業労働	自転車修	世帯主	1	
12	C	3	22	1	3(2)	農業	農業労働	世帯主	0	2,500
13	B11	5	50	1	2(2)	農業労働	農業	世帯主, 長男	0	2,400
14	C	3	45	1	3(2)	農業労働	農業	世帯主, 主婦, 長男	0	
15	S	1	55	1	0(0)	農業	農業労働	世帯主	0	
16	C	3	40	1	5(3)	農業	農業労働	世帯主	0	1,800
17	B11	8	48	1	7(4)	農業労働	農業	世帯主, 主婦, 長男	0	
18	C	5	28	1	5(2)	農業労働	家事労働	世帯主	0	3,500
19	C	7	45	1	3(1)	農業労働	無し	世帯主	0	4,800
20	C	5	33	1	2(2)	農業	農業労働	世帯主, 主婦	0	
21	B11	4	24	1	4(2)	農業	農業労働	世帯主	0	
22	C	7	30	1	3(2)	農業労働	農業	世帯主, 主婦	0	
23	C	5	50	1	5(3)	農業労働	農業	世帯主, 長男	0	
24	C	1	62	0	0(0)	農業労働	無し	世帯主	0	
計		5	41.7	1.6	3.9(2.2)					
建築労働										
1	C	7	40	7.7	5(4)	銀行員	農業	長男	0	54,000
2	A17	20	55	5.2	9(5)	農業	無し	四男	3	7,200
3	A12	12	60	3.1	6(3)	農業	建設労働	世帯主	1	19,200
4	A11	9	45	2.6	4(4)	農業	建設労働	世帯主	0	
5	C	6	45	2.6	5(4)	農業	建設労働	世帯主	0	
6	C	2	50	2.6	2(2)	農業	建設労働	世帯主	0	6,000
7	C	4	50	2.1	4(2)	建設	無し	世帯主	0	4,500
8	C	7	40	2.1	9(8)	農業	建設労働	世帯主	0	12,000
計		8.3	48.1	3.5	5.5(4)					
合計		5.8	42.8	2.1	4.3(2.7)					

(1990年現地調査による)

されている村人は少なくない。すなわち、農業労働者を本業と答えた人は総計28人（24世帯）であり、内訳は世帯主12人、長男8人、主婦5人、次男3人である。ジャーティ別ではグジャー世帯の長男1人（世帯主は郵便職員で、2エーカーの土地を所有する）を除くと、他はすべてジャータブである。ほかに、副業を農業労働者としている世帯主が5、6人おる。農業労働を本業と答えた24世帯も、平均して1.4エーカー(0.56ha)の土地を有し、また年雇の2世帯を除くと、すべて2頭から最高9頭のウシを飼育しており、平均すると3.9頭となる。したがって、一概に農業労働者といっても、その実態は土地改革前と違ってさまざまであり、国勢調査等の官庁統計でこれを取り扱う際には、十分に注意する必要がある。

この他に、村内および近隣村における土木・建築の仕事も増えており、現在これに7、8人が就労している。これまでは農閑期の仕事として主にクマールが働いていたが、今日ではジャータブやブラーマンも携わっている。専業としているのは1人だけで、他はすべて副業として就労している。土木・建築就労世帯が所有する耕地とウシは、平均するとそれぞれ2.1エーカー（0.8ha）と4.3頭であり、農業労働者の世帯に比較するとわずかながら上回っている（表15）。

おわりに—村落変化と村民意識

ディカトプラ村を含むチャンバル川下流左岸の地域は、荒廃したラヴィン地形と繰り返す干ばつといった自然の劣悪性に、ザミンダール制の徹底による搾取やダコイト跳梁による社会不安等が重なって、経済的にも社会的にも低開発な状態から脱却できずにいた。それが、1950年代の土地改革、70年代の用水路灌漑、さらには80年代以降のマスタード特産化を通じて、つぎつぎと大きな変貌を遂げてきた。そうした地域全般の流れの中であって、ディカトプラの村人達はこれを敏感に捉え、よく対応してきたといえる。

一握りのブラーマン地主のもとに、少数のグジャー自・小作農、多数のジャータブ小作農・農業労働者によって構成されていたディカトプラ村は、土地改革を契機にグジャーは自作農として経済的地歩を固め、次に訪れる灌漑農業発展への態勢を整えることに成功した。この村にとって幸いであったことは、用水路に水がきた1971年当時は、ちょうど北インドにおいて緑の革命への期待が現実化されていた時期であったことであり、グジャー農民はこの波に乗って自己の農業経営をラビー小麦中心の二毛作に切り替えていった。一方、世帯数において圧倒的多数派をなすジャータブ村民は、平均2エーカーの土地を手にしたものの、そのみでは自立できないために、政府の保留制度を活用し、またモレナ町の労働力需要の増加に対応して、積極的に農外就業を加えていった。さらに、政府の IRDP

等の補助金を活用して牝水牛の飼育をはじめ、生産したミルクを自家消費ばかりでなく、積極的に販売に向けていった。

県庁所在地であるモレナ町は、用水路灌漑導入後、特に1980年代に入って従来の行政・商業の機能に加えて、農産物の集散・加工機能を大きく発展させてきた。その過程は、周辺農村におけるマスタード栽培、ミルク生産を中心とする商業的農畜業への転換過程であり、また村落社会への商品・貨幣経済の浸透過程として捉えることができよう。この過程の中で、ディカトプラの村民達は現金収入を得るために、農産物の生産・販売だけでなく、多様な職を求めてモレナその他の都市との結び付きを強めている。

こうした外部経済の変化への積極的な対応は、もちろん個人レベルで行われた部分もあるが、より大切なことは最少の自治的行政単位である村パンチャーヤトや、村落の枠を越えたジャーティ集団によってなされてきたことである。ディカトプラ村は現在、本村であった南隣のピパルサと組んでディカトプラ行政村を構成しているが、その村会の議員は11人（ディカトプラ5名、ピパルサ6名）である。ジャーティ別では、グジャー・ジャータブ・カッチ（Kachi）各3名、ゴドリア（Godriya）2名で、その中には女性と指定カーストの席が確保されている。注目されるのは、かつては地主であり、最近まで村の指導者でもあったブラーマンから1名も選ばれていないことである。本村の村パンチャーヤトはこれまで伝統的に国民会議派支持で固まってきており、それによって道路や集落内の社会基盤整備等の諸要求を行政側に提出してきた。飲料用のハンドポンプや家庭電化、家畜診療所や保健所の設置は、村パンチャーヤトからの働きかけによって実現したという自負がある。一般的に言って、ジャーティ集団は国政選挙や州レベルの選挙でも、特定の政治行動をする傾向が強いとされている。この村のジャータブもこれまで、主として指定カーストに対する保留制度の維持・強化を求める関係上、ブラーマン集団が主導してきた国民会議派支持の路線にのってきた。しかし、1980年代後半からインド人民党を支持する人々も多くなっており、村人の政治意識や行動パターンは、その日常の仕事や生活の多様化とともに、複雑になりつつあるように思われる。

最後に、最近30年におけるディカトプラ村の変化について、村人はどのように受け止めているか、簡単なアンケート調査によって得た結果を以下に列記する。村民が大きな変化として評価しているのは、①食生活の向上（小麦のチャパティや各種の野菜が食べられ、ミルクが飲めるようになったなど）、②農業収入の増加（マスタード・小麦の栽培、二毛作が可能、ミルクの販売など）、③諸種の生産手段の改善（灌漑用の水路・井戸、道路・運搬の方法、改良品種の牝水牛など）、④集落内の諸施設の設置と環境改善（飲料用ハンドポンプの掘削、農村電化、小・中学校の新增設、家畜診療所の新設など）、⑤女性の地

位の向上・改善（製粉所開業による挽粉作業からの解放，女子小学校の開設，パルダ制³¹⁾の廃止など）である。その反面，⑥所有耕地の減少（兄弟への均分相続による）を今後の発展への阻害要因と指摘する意見もある。

次に，改善すべき課題または要望としてあげられたのは，①国道までの道路の改良，鉄道駅の新設（申請したが不許可であった）など，モレナ町との結び付きに関するもの，②簡易水道・排水施設の新設，高等学校の設置など，集落内施設の一層の整備，③女性の地位向上（就学率が極端に低い）とともに，料理・衣服の作り方を習いたいというささやかな願いも意外に多い。都市化の影響は，外出の機会が少ない女性達にも確実に及んでおり，パルダ制からの完全な解放が近い将来，期待されよう。

注

- 1) 例えば，佐藤宏（1984）やジョンソン，B.L.C.，山本ほか訳（1986）がある。
- 2) 例えば，南インドのカルナータカ州における農村変貌を詳細に調査した藤原健蔵編著（1985）がある。
- 3) チャンバル流域の農村一般については，① Rita Khanna（1983），ディカトプラ村については，② Bhatnagar, K.S.（1964）および ③ Ram Singh（1988）が，すでに同様な問題意識で詳細な調査を行っている。
- 4) 本稿と同時に公表される南埜猛「チャンバル流域開発における水利システムと受益地域の変化—インドにおける大規模水利事業の研究（1）—」を参照。
- 5) 土地評価の基準に使われている土壌分類は，Gohan（集落地周辺の厩肥その他によって肥沃になっている人為的土壌），Kabar（淡黒色で粘質，粘土・砂比は7：3），Dhumat（黒褐色，粘土・砂比は3：2），Padua（褐黄色，粘土・砂比は2：3，灌漑がなければ小麦はできない），Abhi（冬雨だけで小麦が育つ），Dadha（小石混じりの痩せた土壌）に分けられ，それぞれがさらに細分される。
- 6) これについては，Agarwal, V.K.（1988），および坂田ほか（1989）がある。
- 7) 1981年センサス（Dubey, K.C.（1982）:District census handbook, Madhya Pradesh, p173）によれば，モレナ県下での男女比は，男性100に対して女性は83人であり，全インド平均に比較して女性の割合はさらに低い。
- 8) 前掲3)－③，pp.54-55.
- 9) チャマールの名称は1961年センサスで使っているが，1981年センサスではこれを廃棄してジャータブの名称を用いている。
- 10) 前掲3)－③によれば，モレナ郡の2つの市・町，179の村のうち，指定カースト・指定ドライブの人口が過半を占めるのは，ディカトプラ村を含んで13カ村ある。郡の総人口の20%を占める。
- 11) 前掲3)－②によれば，村から国道にでる道路の建設は1950年代から問題になっていた。
- 12) ラージャスターン州ジャイプール県アバネリ村の場合と比較すると，核家族型が最も多い点では共通するが，合同家族型がわりあい高い値を示す。ちなみに，アバネリ村では209世帯のうち，合同家族型は52世帯（24.9%），中間型60世帯（28.8%），核家族型83世帯（39.7%），その他の型が14世帯（6.7%）である。
- 13) この協同組合は日用雑貨を販売し，順調に運営されていたが，販売の責任者が売上金を持逃げしたため，1年前から営業を停止している。
- 14) 前掲3)－②，p.46.
- 15) 前掲3)－②，p.46. Mourusi というのは相続および譲渡可能な小作権を意味する。
- 16) 前掲3)－②，pp.49-54.

- 17) グラム (Gram) は年間降水量が800mm以下で、灌漑しにくい地域で栽培されている。チャンバル流域開発計画以前、モレナ県はグラム栽培の卓越地域であった。
- 18) 1990年の現地調査の際、ジョワールがわずかながら栽培されているのを見た。
- 19) 1990年現在では、バージェラと小麦の二毛作は1 ha 当り3,000 ~5,000 ルピーの収益であるのに対して、マスタードは1年1作で8,000~9,500ルピーの収益があった。
- 20) チャンバル下流地域の土地荒廃については、藤原 (1992) : 「インドにおける土地荒廃の現状と保全対策」, 『平成元~3年度海外学術研究報告』 pp. 227-244 がある。
- 21) グワリオール酪農連合協同会社 (Gwalior Milk Union Cooperative Limited) が、グワリオール市にあったミルクプラントを手狭になったために、1988年にバモールに新築・移転させた。
- 22) 前掲3)-②, p. 45, pp. 55-56.
- 23) この他、数字にでにくいのが、村内の個人高利貸し (Desi bunk) からの借金で牝水牛を購入したケースもある。政府補助金は、搾乳用ウシの購入の他に牡牛・牛車が3, 灌漑井戸関係2, 商店1がある。
- 24) この酪農補助の金額は1世帯5,000ルピー (3分の1補助) であり、現金で手渡すのではなく、多くは7, 8月頃に出産した親牛とその子牛と一緒にして家畜市場や地区開発事務所で購入し、農家に引き渡す。
- 25) 前掲3)-③, p. 87 には、グジャーの3人が従事するとあるが、それはおそらく専門的商人のみと思われる。村人からの聞き取りによれば、当時は兼業を含めて8人ほどいたといわれる。
- 26) 村内にあるトラクター6台はすべてグジャーが所有する。最初の購入はおよそ30年前で、その人は現在、モレナ市で運送業を手広く経営している。
- 27) 家畜市場の市日は、アンバー町が月曜、モレナ町が火曜、グワリオール市が水曜という具合に、巡回して開設されている。
- 28) これについては、中里亜夫 (1989) および中里亜夫 (1991) がある。
- 29) 酪農業先進地のグジャラート州アーナンド (Anand) 市を中心にして展開するミルク生産者組合の組織で、生産者・村落・県・州のレベルで結び付いている。これに関する資料としては、National Dairy Development Board (1976) および Singh, S.N. (1990) などが基本的文献である。
- 30) 3)-③, pp. 120-121. 本村は鉄道に近いことから、古くから鉄道関係に未熟連労働者として働くものが多かった。3)-②, p. 48. によれば、1961年当時で常雇い9人、臨時雇い8人、計17人の就労があった。
- 31) パルダ (Parda, Close の意味) 制では、結婚した女性は人前に出られず、他人を家の中に招くこともできない。外に出る時はサリーで顔を隠さなければならない。しかし、現在はこの風習は弱まり、数カ月に1度は夫と一緒に市場に出かけるようになった。

文 献

- 藤原健蔵 (1981) : 「インドの農業開発と農村」, 『地理』, 26-7, pp. 13-23.
- 藤原健蔵編著 (1985) : 『デカン高原南部の農村開発』, 広島大学総合地誌研究資料室, 277p.
- 藤原健蔵 (1992) : 「インドにおける土地荒廃の現状と保全対策」, 『平成元~3年度海外学術研究報告』 pp. 227-244
- 弘中和彦 (1984) : 「教育の現状と課題」, 近藤編『インド世界—その歴史と文化』, 世界思想社, 195p.
- 南 亮三郎編 (1965) : 『インドの人口増加と経済発展 I』, アジア経済研究所, 289p.
- 中里亜夫 (1989) : 「家畜経済と宗教の狭間」, 佐藤・内藤・柳沢編『もつと知りたいインド I』, 弘文堂, pp. 278-291.
- 中里亜夫 (1991) : 「ウシとインド農村社会—白い革命が農村社会を変えるか—」, 『地理』, 36-8, pp.40-46.
- 坂田・田中・橋本・福永 (1989) : 「地上の天界を歩く人びと—北インドにおけるクリシュナ信仰と集団巡礼—」, 『Journal of Asian and African Studies』, No. 37.

中里亜夫 他：用水路灌漑と地方小都市の影響で変貌する旧地主村落・ディカトブラ

- 佐藤 宏 (1984) : 「インドー男子単身移動は典型か」, 柴田・加納編『第三世界の人口移動と都市化』, アジア経済研究所, pp. 50-72.
- ジョンソン, B.L.C. (山本ほか訳) : 『南アジアの国土と経済ーインド』, 二宮書店, pp. 156-168.
- Agarwal, V.K.(1988) : *Marketing of dairy products in Western U.P.*, Himalaya Publishing House. 216p.
- Bhatnagar, K.S.(1964) : *Census of India 1961 – Village survey monographs*, DIKHATPURA, 80p.
- Martin Doornbos and K.N.Nair(1990) : *Resources, institutions and strategies – Operation flood and Indian dairying*, 400p.
- Nair, K.N. (1985) : *White revolution in India : Facts and issues*, *Economic and Political Weekly*, 20-25.26, pp. 90-95.
- National Dairy Development Board (1976) : *Milk Procurement through Producers Co-operatives*, 178p.
- National Council of Applied Economic Research (1967) : *Cropping pattern in Madhya Pradesh*, New Delhi.
- Ram Singh (1988) : *Census of India – Survey report of village DIKHATPURA*, 611p,
- Rita Khanna (1983) : *Agricultural mechanisation and social changes in India – A case study of chambal region –*, Uppal Publishing House, New Delhi.
- Singh, S.N. (1990) : *Saga of Anand pattern Cooperatives – A Proven Model for Rural Development through Cooperatives, in India*, N.D.D.B., 40p.